自覺に於ける直觀と反省（承前）

西田幾多

三十三

余は前節に於て、純粹幾何學のアプリオリの性質について略余の考ふる所を述べ、且つ之と數の體系との關係を論じたのであるが、今一度此等の點を論じ、進んで純粹思惟の體系と經驗の體系との接觸點を考へて見たいと思ふ。之に依て知識の形式と內容との關係の問題の方にも進むことができると思ふのである。

性質的と云へば普通に赤とか青とかいふ如き經驗內容を考へるのであるが、性質的といふことはすべて經驗の體系が卽自の狀態に於てある場合をいふのである。獨り感覺が性質的と考へられるのみならず、反省によつて自己に還つた我も亦性質的と考へることができるのである。之に反し赤とか青とかいふ所謂經驗的內容も必ずしも性質的と限つた譯ではない、此等の內容も槪念として考へられた時、種々なる經驗の關係を意味するものと考へることもできるのである。純粹思惟の體系と色

の經驗の體系といふものとを比較して見れと、主觀的作用の方では思惟作用 Denken は視覺作用 Sehen に當り、客觀的對象の方では單に思惟の對象たるボルツァーノの命題自體といふ如きものは所謂表象自體としての色自體といふ如きものに當り、後者を客觀的存在といふ範疇に當嵌めて考へて見れば、一方に於てボルツァーノの命題自體は眞理自體となるに應じて、一方に於て色自體は自然科學的存在といふ如きものとなる考へることができる。斯く兩種の體系の間に一々の相應を見出すことができ、而も此等の區別は各自獨立せるものゝ區別ではなくして、一つの自覺的體系に於ける異なれる象面に過ぎない。或一つの具體的一般者がそれ自身の發展に於てある時は主もなく客もないが、この體驗がその背後に横たはる包容的主體の立場に於て見られた時、此主體の連續としてその發展の相が思惟作用とか視覺作用とかいふ如き主觀的作用と考へられ、此の如き作用の起點卽ち作用の經驗と背後の主體との接觸點が心理的我と考へられる。之に反しそれが統一の相に於て見られた時、卽ち包容的主體の對象界の連續として見られた時、客觀的對象或は存在となる。例へば圓とか楕圓とか拋物線とかいふものゝ各々がそれぞれ一つの連續的主體と考へることができるが、之を二次的函數によつて表はさるゝ連續的主體から見れば、何れも

その特殊なる場合として極限概念によつて統一することができる。嘗て云つた様に、一般的二次方程式に於て $b=0, a=b$ といふ如きものが圓なる主體の作用的性質 Aktqualität として考へることができ、而して此の如き作用の性質が極限概念によつて統一せられ、大なる連續的主體の中に取り入れられて、圓の種々なる性質が一般的二次方程式の曲線の性質の中に統一して考へられたる時、それが客觀的となる。圓とか楕圓とかいふものが卽自の狀態に於て考へられた時は性質的であるが、二次方程式の曲線といふ如き包容的主體の上に於てその極限として考へられた時は量的と考へられる。連續數によつて我々は質的なものを量的に考へることができる、連續は質と量との內面的統一である、質を量化した質である、主觀を客觀化した主觀といふことができる。

自覺的體系が單に己自身を限定した時、卽ち向自の狀態が論理的判斷であつて、單に性質的である。併し自覺的體系はそれ自身の中に發展の動機を藏し、發展的限定は自ら還元的反省となり、還元的反省は直にまた發展的限定となる。自覺はヘーゲルの云ふ如き向自と向他との統一である。向自の中に向他を含むが故に、論理の立場から數理の立場に移り行くことができ、質的「或物」は量的「一」となる、量的「一」といふの

は向自と向他との兩面を具備する具體的對象である。性質的區別に赤とか青とかいふ內容があれば此の如き統一はできないのであるが、思惟對象の無內容といふことが此の如き統一を內面的に必然たらしむるのである。此の如き兩面を內面的に統一する量的「一」、卽ちヘーゲルの所謂 Fürsichsein といふべきものは、數の要素「一」であると共に、幾何學的空間の要素「點」である。數學的對象の要素は此の如き自覺的體系の顯現である。それでは數の「一」と幾何學的空間の「點」との區別は何處から起つて來るか。余は Fürsichsein たる數學的要素は自覺的個人を全然無內容に形式的に考へた如きものであつて、自覺の發展は我々が內省的に自證する如く兩方面に發展することができると思ふ。一つは我々の個人的歷史に於て見る如く時間的に縱に發展するので、一つは大なる自己の中心に向つて橫に發展するのである、前者は個性的發展であり、後者は普遍的發展である。此の如き兩傾向の發展は無內容にして形式的なる數學的對象の中にも旣に含まれて居ると思ふ、これが自覺的統一の根本的性質であるのである。我々の自覺はそれぞれ獨立な自由な人格であると共に、大なる自覺の部分である、我々の人格は神の人格の一部である。個人的發展の方面は時の基礎となり、數の基礎となる、コーヘンが Die Anticipation ist das Charakteristikum der Zeit と

云ひ、數の範疇は之に基くといふのも之に依るのである。之に反し普遍的發展の方面、卽ち人と人との結合の方面は空間の根柢となり、幾何學的關係の基礎となる。要するに、右の兩方面といふのは自覺に於ける進行の方面と反省の方面とであつて、この兩方面の內面的統一が自覺である。前者は我々の精神であり、後者は身體であり我々の行爲は兩者の自覺的統一であるとも考へられる。反省の方面が空間となり、心外の自然となるのである、反省といふことは過去に還ることの樣に考へられるが、或一つの立場からその背後の大なる立場に移り行くことである。

自覺的體系が自己の中に自己を寫すといふことに依つて自然數の無限の系列が成立し、この系列を元に還つて見たもの、卽ち反省して見たものが直線である。數學者が直線は二點間に定められた一つの關係であるといふのは此の如き自覺の反省を指すものである。或一個人の自覺の形式が一の直線である。純粹幾何學の直線といふのは極めて抽象的な個人の自覺である。而して或一人の個人が自覺するといふことは他の個人の無限なる自覺を許さねばならぬ、自分の人格を認めるものは他の人格を認めねばならぬ、卽ち自分を認めるといふことは自他の關係を認めることでなければならぬ。或一つの方向に於て直線的關係を認めるといふことは、他の

方向に於ける同樣の關係を認めることとならねばならぬ。二つの自由なる人格の關係が二次元であり、三つの人格の關係は三次元である、以上之に倣ふのである。唯無限なる人格の結合はまた元の反省なき無限の系列に還るの外はない。余は道德的社會と純粹空間とは同一の根據を有つたものと考へる。二つの直線の結合點は二つの人格を結合する大なる一人格であつて、三つの方向の結合は三つの人格を結合する大人格である。數學者は幾何と算術とを嚴密に區別するかも知らぬが、余は或一つの定つた數を考へる所に既に空間の考があると思ふ、此時既に自覺の限定的作用の方面が働いて居るのである。

幾何學者は直線を定義するため線分 segment と延長 extension とふことを考へる、$\overline{AB}=\overline{AC}+\overline{CB}$ の C が segment of A and B であつて、B が extension of (AC) beyond C である、直線は the assemblage of all points of a segment and its extension であるとふ (Coolidge による)。此の如き線分と延長とふのは自覺的體系が反省的と進行的とに發展することを意味するのである、卽ち內と外とに己自身を限定し行くことを云ふのである。數の系列は此の如き自覺的體系を對象化したもので、幾何學的關係はその主觀的作用の方面を現はすものと考へることができる。此の如き自覺的體系が完全に言ひ表は

されたものが客觀的には實數の體系であり、主觀的には連續的直線である。我々が直覺的に感する直線性 Geradheit とは此の如き無限に發展する自覺的體系の意識でなければならぬ。右の如き自覺的體系がそれ自身を完成しそれ自身を自覺した時、己自身を否定して他に獨立の自覺を要求することゝなる。All points do not lie in one line といふ幾何學的公理の根柢には右の如き理由があると考へなければならぬ。一つの自覺的體系が實數の系列として、連續的直線として、それ自身を完成した時、自覺的體系の卽自の狀態、卽ちその性質的方面が積極的に現はれることができ、純粹思惟の自覺的體系に於て性質的區別の考が起つて來なければならぬ、卽ち一つの卽自と他の卽自との關係の考が起つて來なければならぬ。變數と變數との間に於ける種々の函數的關係も之に依つて成立するのであると思ふ。而して種々の性質的關係が極限概念を通じて量的に統一せられたる時、自覺的體系がその全き形に於て具體的に現れるといふことができる。此の如き意味に於て解析幾何學の對象は自覺的體系の具體的顯現である。嘗て客觀的知識發展の目的とならねばならぬと云つた數學と幾何學との結合は、單に應用といふ如き偶然的關係ではなくして、自覺的體系の性質的方面の發展の要求に基くといふことができる。超越的感覺として直接

に現はれ來る空間の直覺は解析幾何學的のものでなければならぬ。

三十四

自覺的體系はその自己に返る反省作用と自己を發展する進行作用との合一であつて、その向自的方面、卽ち性質的方面が先づ形式論理學の據つて立つ所のアプリオリとなり、更に發展して純粹幾何學の據つて立つ所のアプリオリとなる。解析幾何學の對象は量的方面と質的方面とを統一する自覺的體系の具體的顯現であるといふことができる。我々の知識の目的は抽象から具體に行くことである、我々が或一つの立場に立つた時、それが主觀であつて、客觀を知るといふのはその背後に横たはれる具體的體系に移り行くことである。解析幾何學の空間は此の如き意味に於て知識其物の性質から要求せられた認識對象と云ふことができる。余は思惟の體系と經驗體系との接觸點を論ずるに先だち、先づ心理的性質として考へられる直線性 Geradheit といふものが如何なるものなるかを考へて見ようと思ふ。

我々の意識內容として、客觀的直線卽ち幾何學的直線から區別せられる經驗的直線とは如何なるものであるか、我々が甲點より乙點に眼を移すことによつて見、手を

動かすことによつて感ずる直線とは如何なるものであるか。心理學者はこれを運動の筋覺によつて説明しようとする、例へばヴントは盲人の空間表象を定義して das Produkt einer Verschmelzung äusserer Tastempfindungen und ihrer qualitativ abgestuften Lokalzeichen mit intensiv abgestuften inneren Tastempfindungen と云つて居る。此場合、我々をして直線を意識せしめるものは性質的に又は强度的に階級付けられた感覺であらう。此の如き直線の意識は心理現象として如何なる性質のものであらうか。心理學者は客觀的意識內容卽ち所謂知識は盡く感覺の要素に分析ができるといふ、それでは直線性 Geradheit の意識も一つの感覺と考ふべきであらうか。若し之を他の階級的感覺 abgestufte Empfindunge と同列の感覺と考へるならば、如何にしてこの意識が他の感覺を結合する統一の作用をなすことができるであらうか。之に反し若し之を他の感覺よりも一層高次的な意識とするならば、此處に感覺と異なつた一層高次的な意識を認めねばなるまい。ヴントが心理的因果律の特色として、要素の結合の上に要素の中に含まれなかつた特徵を生ずるといふのは、後者の意味に於て理解することができるのである。階級的感覺が一つの空間的知覺として意識せられるには、それに意味の意識が加はつて來なければならぬ、單に階級的感覺の算術的總計か

ら何等の高次的意識を生ずることはできぬ。それでは階級的感覺を統一して一直線の意識を構成するものは何であらうか、余はこれを自覺的體系の發展の意識であると思ふ。我々は内に省みて自己の發展の無限なる可能性を自覺する、これが直線の意識である、directed destance $\overrightarrow{AB}$ の意識である、眞直といふことは此の如き體系の卽自の狀態を指すのである。普通には「眞直な」といふことは赤とか青とかと同じく、精神現象の性質として、主觀的と考へられるのであるが、考へられた性質としての眞直とか赤とか青とかいふことはボルツァーノの所謂表象自體といふ如きものであつて、必ずしも精神的でもなければ又物體的でもない、此等のものが精神的と考へられるか物質的と考へられるかは、その前後の關係によるのである。眞に直接な具體的實在は向に云つた先驗的感覺といふ如きものであつて、その見方によつて物理學的ともなり心理學的ともなるのである。すべて自覺的體系を卽自の狀態に於て見たものが性質的であつて、心理學者の感覺といふのは此狀態を直に實在的と見たものである。赤とか青とかいふことも關係の意識として見ることもできれば、眞直といふ如きも單なる感覺的性質として見ることもできるのである。直接經驗の物理的分析は量的分析であるとすれば、その心理的分析は質的分析であるといふことができ

るであらう、而して質的分析といふのは自覺的體系の中心點の分析卽ち卽自の狀態の分析である。無內容な形式的自覺的體系卽ち思惟體系といふ如きものが、一方に於て數の系列として發展すると共に、一方に於て幾何學的次元として發展する樣に、すべての自覺的體系は此の如き兩方面に於て發展を具へて居ると思ふ。赤とか靑とかいふ如き所謂心理的性質と考へられるものも直接の具體的經驗としては右の兩方面を具備したもので、我々が赤とか靑とかいふ感覺を內省して之を單純なる感覺的要素に分つといふのは、此の如き體系に於ける向自作用の立脚點を分析すると考へることができる。我々の現在に於て最早それ以上に分つことのできない立脚點が心理學者の所謂單純なる感覺となるのである。

それで階級的感覺が融合して要素の中に含まれない一特色を有する空間的表象が成立するといふのは、此等の感覺がその具體的狀態たる自覺的體系の形に於て意識せられるといふことでなければならぬ。微細に階級付けられた感覺が一つに統一せられると考へるのは、此の如き階級を成立せしめた連續體が意識せられるのである。要するに階級的感覺が融合して一つの空間的表象となるといふのは抽象的概念から具體的實在に移り行くことである。階級的感覺といふ如きものは心理學

者の作爲した抽象的概念に過ぎない、具體的實在はそれ自身に於て連續的なる自覺的體系である、精神的要素の結合するに當て、結合が外より加はるのではない、元に還つて見るのである。感覺は物質的原子の如く獨立の實在であつて、その結合によつて精神現象が生ずると考へるのは誤である、直線性といふ如きことも一つの感覺として意識せられた時に、は、他の感覺と同列であつて、他を結合する力を有たないのである。心理學者は精神現象はすべて性質的に區別せられるものと考へ、精神現象に於ける强度の差といふことをも一種の性質的區別と考へるのであるが、嚴密なる意味に於て性質的に異なつたものは絶對的に異なつたものである、性質的階級といふものが考へられる時、既に强度的差別の考が含まれて居らねばならぬ。而して性質的なるものが强度的階級に於て考へられるといふことは、性質的なるものがその發展の相に於て考へられることである、卽ち自覺的體系の具體的狀態に於て考へられることでなければならぬ、何となれば具體的實在は質的なると共に量的なるが故である。感覺が結合せられるといふのは此の如き具體的實在に還つて見ることである、生成上では全體が先となるのである。

我々が或一つの自覺的體系を反省して見た時、その體系の中心から具體的原形に

於て見ることもできれば、その背後の更に大なる立場から後者の對象中に入れて見ることもできる。自然科學的知識に就て云へば後者が機械觀的見方であつて、前者が目的觀的見方であるといふことができる、心理學的見方は更に前者の方へ一歩を進めたものである。而して此等の見方は各異なつた現象とか實在とかいふものを見て居るのではなく、皆同一の實在を對象として居るのである。物理學的見方から心理學的見方に近づくに從つて實在の具體的に近づくのである。ヴントが、我々の直接經驗の內容は繰返すことのできる空間的結合のものと然らざるものとに分れ、後者の體系が主觀となるといふが、後者の體系が所謂直接なる具體的體系である(Wundt,Grundriss, 10Aufl,S267)。自覺的體系は推論式的であり、推論式は自覺的體系の言表であるとして考へて見れば、その大前提たる假言命題は背後の大なる立場を現はし、小前提たる定言命題は體系の中心を現はし、結論に於て此二者が結合せられ自覺的體系の全體が現れると考へることができるであらう。而して推論式的の自覺的體系に於て小前提の位置にあるものは大前提に對して定言的なる事實的知識であり、心理學者の所識直接の心理的事實といふものなり、之に反し大前提の位置にあるものは一般的知識であり、物理的知識であるといふことができる。フッサールの所

謂本質 Wesen といふ如きものは物理的でもなければ心理的でもない、又單なる事實的知識といふものもこの何れにも屬せない、二種の知識の區別は一般と特殊との何れを重んずるかに依つて分れるのである。或經驗內容が意識せられると否とは經驗內容其物に何物をも加へない意識とは經驗內容の發展の程度を示すに過ぎない。經驗內容の本質はボルツァーの表象自體とか命題自體とかいふ如きものであつて、それ自身に獨立なるものである。ロックの二次的性質といふ如きものは意識に屬するものと考へられるが、ボルツァーなどの樣に、色自體といふものでも、音自體といふものでも意識住用を超越するものと考へることもできる。所謂物理的世界もこの經驗內容を離れて考へることはできぬ、之を材料として組織したものである。普通には有機體といふものを考へ、所謂二次的性質といふ如きものは之と外界との關係から生ずるものと考へるが、却つて性質自體が根本的であつて、有機體といふ如きものも此等のものから成立して居ると考へねばならぬ。要するに經驗內容とその變化とが直接の所爲であつて、物質自體とか有機體自體とか又は精神自體とかといふ如きことは此等の內容を統一する種々の中心に過ぎない。ベルグソンの考へ方に依つて云へば、縱線的進行たる純粹持續を同時存在の平面に直して考へたものが物質界

であつて、此等の兩方向の接觸する所が我々の身體である、而して純粹持續の尖端が同時存在の平面を押して進む所に我々の意識が現はれるのである。腦の中に意識現象を生ずる潜勢力を藏し、外界刺戟に應じて意識現象を生するのではない、身體は單に運動の機關であつて腦は運動の中樞たるに過ぎない、我々の身體とは持續の横斷面たる物質界の上に投げられた記憶の影である。緊張の裏面に弛緩を含み、前者が純粹記憶卽ち精神の方面であり、後者が物質の方面である、前者は時間であり、後者は空間である。le passé se conserve delui-même, automatiquement といふ樣に、己自身を維持して進む純粹持續の尖端が現在であつて、そこに空間があり、物體界がある。この兩面の接觸する所が senso-motorisch なる、我々の身體である、我々の身體とは持續が物質界を突破して進む運動の機關であつて、所謂意識とはこの運動に對應する持續の一面である、身體の運動が增すと共に意識の範圍も增すのである。身體は物質界に於て持續を表はし、意識は持續に於て、運動を表はすと考へてよい。物質に或物を加へることによつて意識を生ずるのではなく、意識から或物を減ずることによつて物質に到るのである。以上の如くベルグソンが精神と身體との關係に就て云つたことは、論理や數理の基として既に論じた如き自覺的體系に依つて、一層深く且つ一般的

に考へることができると思ふ。ベルグソンが內面的持續 durée interne とか純粹持續 durée pure とかいふのは意味卽實在、行爲卽事實なる自發自展の自覺的體系である。時間と云へば實在的なものと考へられるが、氏の le temps qui s'écoule の概念を純化すれば、余が從來論じ來た如き意味に於て自覺的といふことに過ぎない、或は推論式といふこともできるであらう。之に反し自覺的體系の統一の方面、卽ち推論式の大前提が切り離されて考へられたとき、それが空間である限定作用から切り離された自覺的體系が同時存在の物質界である。ベルグソンは純粹時間は繰返すことができないといふが、繰返すことができないといふのは、その根柢に時間に超越する或物がある故でなければならぬ。氏は時間の考に捕はれて、變化を超越する統一の方面を見逃して居る樣である。我々が眞にエラン・ヴィタールの尖端に立つ時、そこに空間もなければ、時間もない、ファウストの云ふ如く Im Anfang war die 'Tat ! である。而もこの行爲は時間的行爲ではない、空間時間よりも直接で且つ根本的なものでなければならぬ、卽ち理其物の發展といふ如きものでなければならぬ。ヘーゲルが Der Schluss ist das Vernünftige und Alles Vernünftige, と云つた樣に、すべて實在は推論式的であつて、その一般的法則を表はす大前提の方面がベルグソンの所謂物質界であり、空

間である。之に反し事實を表はす小前提の方面が意識界であり、現實である、而して此處に精神と物體との接觸點がある、卽ち我々の身體がある。大概念が客觀的物體の範圍を示すとすれば小概念は主觀的自己の範圍を示すといつてよからう。ベルグソンの所謂內面的持續の方面は推論式の背後に橫はれるアプリオリの連結と見て、コーエンの所謂連續原理 Princip der Kontinuität の如きものをそれと考へることもできる。斯くして精神作用といふのは推論式の根柢たる一般者が己自身を限定する過程と考へることができ、大概念と小概念との間に於ける種差 specifiedifference といふ如きものが作用の性質に相當すると考へることができると思ふ。

三十五

余は前節に於て直線性 Geradheit の意識といふのは、自覺的體系が內に省みてその無限的發展の可能を意識することであると論じ、併せて意識といふことは自覺的體系に於て如何なる意味を有するかを論じた。今赤とか靑とかいふ如き內容ある經驗の意識に就ても同樣のことを考へて見たいと思ふ。

色とか音とかいふ所謂感覺的性質は、普通の考へ方では、外界刺戟が神經の末端を

刺戟し、その刺戟が腦皮質に傳はり、その結果として腦中樞の刺戟に伴ふて起る意識現象の性質であると考へられて居る。斯くして腦中樞に於て恰も魔術の棒に依つての如く起されたる意識現象と、外界刺戟とは全く異なつた者と考へられる。此等の感覺の外界刺戟はエーテルの振動とか空氣の振動とかいふ如き純機械的運動であつて、色とか音とかいふものとは何等の類似をも有たないものと考へられて居る。併し翻つて我々の直接の經驗から出立して見れば、赤とか青とかいふものが直接に與へられた經驗であつて、所謂物體現象といふのは此等の經驗の關係を統一した抽象的概念の世界に過ぎない。而してその直接に與へられた經驗といふものは心理學者の所謂感覺といふ如きものではない、マックス・ラファエルの云ふ如き表現の手段として藝術家の見た感覺といふ如きものが却つて眞に直接な經驗といふべきであらう。藝術家の表現手段としての線は數學者の直線の如きものではない、そのすべての點に於て直線と曲線との Durchdringung を現はすのである、卽ち eine Spannung der Dimensionen である。色に就ても同樣のことが云へる、藝術手段としての色は其中に白と黑との傾向を藏して居る、卽ち色はいつでも心理學に於て云ふごとき三次元的連續 dreidimensionales Kontinuum に於て、成立つて居るのである。我々の直接經驗は

マイノングの所謂 Sosein といふ如きものより構成せられて居るのである。今、色とか音とかいふ經驗を純粹にかゝる立場から考へて見れば、此等の經驗は空間、時間、因果の關係を離れて、それ自身の內容に依つて一つの體系を成すものと考へることができる。マイノングの對象論 Gegenstandstheorie やフッサールの本質學 Wesenswissenschaft といふものが之に當ると考へることができる。此の如き體系に於ては所謂經驗內容は全く非實在的と考へられる、卽ち全然假言的である、此等の體系が實在と考へられるには、それ自身に發展的とならねばならぬ、是に於て心理的實在なるものが考へられて來るのである。我々が視覺作用とか聽覺作用とかいふのは經驗內容の發展の相に於ける統一をいふのである、物理學者が經驗を量的關係から統一して種々の物力を考へる樣に、心理學者はその質的關係から統一して精神作用といふものを考へるのである。斯くして精神現象と物體現象との區別は同一經驗の見方の相違であるといふ樣に考へられ、而も精神現象が却つて具體的實在であつて、ベルグソンの云ふ如く、物體現象に或物を加へて意識現象を生ずるのではなく、却つて後者から或物を減じて前者に到ると考へることができるのである。

現今の心理學者のいふ所によれば、我々が現在に於て有する種々の感覺的性質の

區別は元來一般感覺 Gemeinempfindungen より分化發展し來つたものであるといふ(Wundt, Grundriss. §6.)。人類は元下等動物から進化し來つたもので、下等動物には觸覺の外、所謂特殊感覺といふ如きものがないとすれば、斯く考へられるのが當然である、且つ內耳の構造に於て、明にその發展の跡をたどることができるとさい云はれる。右の如く考へる人々は、種々なる感覺的性質の區別は我々の神經組織の中に潛在的に含まれたものが發展し來ると考へるでもあらう、恰も Keimplasma から種々なる生物の種屬が發展し來る如く、神經の物質から種々の感覺が發展し來ると考へるのでもあらう。併し元來我々の直接經驗の內容たる感覺的性質を、その外界及び內界の刺戟と云はれる物理的及び生理的現象の性質から導き來るのは不可能なことである、却つて前者の方が後者より根本的なものでなければならぬ。我々が直接に知り得る動かすことのできない事實は、所謂感覺內容といはれるものゝ相互の關係及びその變化である。フレネルの鏡の實驗 Spiegelversuch に依つて光線がエーテルの振動であることが證せられるといふも、殆んと百八十度の角をなせる二個の鏡面から反射せられた光の明暗の交互によつて波長を計算するのである。我々の知り得る動かすことのできない知識は、明暗の交互とその距離の量的關係に過ぎない、それ以

上は假說である。假說はフレネルの樣に考へても又マックスウエルの樣に考へてもよい、或は今日の相對論者の考の樣にエーテルの存在を否定することもできるのである。唯右の如き事實の量的關係を表はす微分方程式は何時でも動かすことができないのである。嚴密なる直接經驗の立場から考へて見れば、我々の經驗內容は何時でも一般から特殊に進んで行くのである、一般的なものが分化發展して行くのである。例へば色の感覺が發展し來るに就ても先づ朦朧たる明暗の意識から、漸次明瞭な色の感覺が發展し來るのである。生理學者や心理學者は之を神經組織の中に含まれたさのから發展し來ると考へるかも知らぬが、ベルグソンの樣に考へれば、身體は物質界に於る精神の代表者に過ぎない、物質界といふ同時存在の平面に於ける純粹持續の射影圖である。眞に直接な具體的實在は自覺的なる色の體驗其物である、直接經驗の世界では色の一般概念の如きものが實在的である。フレネルの鏡の實驗の如きものに於ても、精細なる明暗の識別作用といふものが先づ與へられて居なければならぬ、而して識別作用卽ち判斷は一般概念が與へられることに依つてのみ可能なるのである。物理的にはこれがエーテルの振動と考へられるかも知らぬが、直接には色はそれ自身に働く具體的一般者である、一つの內面的連續である。我

々の直接經驗の背後には何時でも創造的進化が働いて居る、色の經驗の發展といふ如きものも一つの創造的進化である、一般的或者が己自身を限定して行くのである。これが原因として考へられる眼といふ如きものは、之と對應的に考へられた物質界に於ける射形圖に過ぎない、眼とは色の經驗と物體界と接觸點である、正しく云へば自覺的體系の限定點と見ることができるのであらう。

すべて一般的なるものが己自身を限定し行くに當つて、卽ち自覺的體系の發展に當つて、我々は二つの方向を區別することができる。一つは一般から特殊に行き、一つは特殊から特殊に行くのである。前者に於て新なる內容を生じ、新なる立場に移り行くのであるが後者に於ては同一の立場に於て發展し行くのである。ベルグソンの語を藉りて云へば、前者は純粹持續の縱線的發展であり、後者は同時存在の平面上に於ける發展ともいふべきであらう。圓錐曲線の例によつて云へば、種々の圓錐曲線は極限概念に依つて互に移り行くことができ、直線、圓、橢圓、拋物線、双曲線等それぞれ異なつた立場と性質とを有するものなるに關らず、圓錐曲線、といふ一つの連續體と見ることができる。併し分化した線は又それぞれの立場に於て、無限に發展することができる、例へば直線にも種々の長さの直線があり、橢圓にも種々の曲率の橢

圓があるのである。右の樣に考へて見ると圓錐曲線といふ如き一つの連續體が種々の線に分化するのが、所謂精神現象的發展であつて線とか圓とか楕圓とかいふものがそれぞれの立場に於て發展するのが、所謂物體現象的發展である。眼のない動物が初めて眼を得た時、その光覺は極めて朦朧たる明暗の意識の如きものであつたであらう。此の如き光覺的意識が漸次に分化發展して今日我々が有する如き精細なる色の識別ともなつたのである。此種の發展は圓錐曲線の連續體が種々の曲線に分化する如き立場の分化である、アプリオリの特殊化である、その發展の背後には一々エラン・ヴィタールが働いで居たと考へることができる。心理學者が精神現象を性質的に分析するといふのは、此の如き立場の分析である、內に省みてエラン・ヴィタールの飛躍點を求めるのである。前にも云つた如く、性質的分析は自覺的體系の立場の分析である。此故に性質的に異なつたものは互に disparat でなければならぬ、此等は皆宇宙の生命たるエラン・ヴィタールの飛躍した足跡であるからである。又一方からは此等の單一なる性質、卽ち自覺的體系の立場の一々はいづれも一つの自己と考へることもできる、それぞれが一つの自覺的體系の中心と考へることもできる、而して斯く一々が自己と考へ得ると共に、一々が一つの作用とも考へることができる。

感覺的性質の分化發展に伴ふて感官の分化發展が假定せられ、そこに特殊の精神作用といふものを考へることができるのである。音の經驗とか色の經驗とか、經驗の性質の異なるに從つと、我々は之に對してそれぞれの精神作用を考へるのである。感覺作用に對して表象作用とか思惟作用とかいふ如きものも、一層高次的な此の如きエラン・ウィタールの飛躍の中心と見ることができる、作用 Akt といふのはエラン・ヴィタールの中心から純粹持續を統一して見たものと考へられるのである。勿論以上の如き考に對しては、それでは意識は何處から生じて來たか、意識發生以前に世界は存在せなかつたか、今日の Cosmogonie に於て論ぜられる星雲說の如きは全然虛僞であらうかといふ如き疑問も起るであらう。余は大膽なる言ひ方ではあるがコスモゴニーに於て言はれる如き宇宙發展の順序は經驗界の一つの考へ方に過ぎぬと思ふ。物理學的アプリオリに依つて定められた物理的時間 physikalische Zeit から見た順序に過ぎない、余は此の如き順序は必ずしもエラン・ヴィタールの內面的創造の順序ではないと思ふ。內面的創造の順序、例へばフッサールの所謂現象學的時間といふ如きものは物理的時間よりも根本的である、後者は却つて前者の中に於て成立するものであると思ふ。宇宙の眞の始は星雲の昔にあるのではなく、內面的創造の中に心

あるのではなからうか。時の相對性原理といふ如きものが眞理であるとするならば、ルーメンの旅行に於ての如くに、我々に時間を逆に見て居るのであるかも知れない。現今物理學に於ける相對性原理は尙疑を抱く人があるとしても、元來絕對的時間といふ如きものは、理想に過ぎないので、實際に於て絕對的時間といふものを定めることはできまい。物理的現象に於ける坐標の取り方に依つて、時間上の前後も定まつて來るのである。我々の經驗內容を空間の形式の中に排列し、その坐標の取り方に依つて、時間上の前後が定まつてくるのである。併し我々は此の如き加工以前に遡つて、經驗の順序を考へて見なければならぬ。經驗の秩序といふことは種々の意味に於て考へることができる。例へば、空間的經驗に就て見ても、先づ我々の個人的歷史に於ける發生的順序といふ如きものを考へ、更に同樣の考へ方を人類全體又は生物全類の歷史にまでも及ぼして考へることができれば、又純論理的に見てすべての關係を理由と結論との關係に依つて考へることもできる。加之、更に進んで認識論的に知識成立の順序を論じて嘗てはフィヒテ、ヘーゲルなどの如く、近くはコーエンの如く空間範疇を創造的思惟發展の順序に於て考へて見ることもできる。右の如き考へ方の中、心理學的又は生物學的の考へ方に對しては物理學的の考へ方が根

本的であるかも知らぬが、後の二つの考へ方は却つて物理的の考へ方よりも一層根本的であると云はねばなるまい、此處では我々の經驗內容は價値に從つて發展するのである。無論余は價値的順序と時間的順序とを混同するのではないが、時間的順序といふことは我々の經驗の一つの見方に過ぎない、之に先つて種々の價値的順序や經驗內容の性質的差別といふものが與へられて居なければならぬ。斯くして時間的順序は却つて價値的順序に基くと云ふことができる。

三十六

我々の普通に考へる所によれば、眼といふ感官ができてはじめて光の感覺といふものが生ずるのである、卽ち眼といふ感官の發生によつて我々に光の世界、色の世界が開かれるのである。眼を失ふと共に、我々は光の感覺を失ひ、之と共に光の世界、色の世界は直に消え去るのである。斯く考へて見れば、眼が光覺の原因であるといふことは疑ない樣であるが、我々の眼といふのは如何なるものであらうか、眼は如何にして此の如き働きをなすことができるのであらうか。眼も物質界の一部分であつて、所謂物質的元素以外のものから成立つて居るものとは考へられない、要するに若

干の化學的元素の結合せるものと考へるの外はない。而して今日科學者の考へる様な然るに化學的元素といふものは原子量といふ如きものを考へることに依つてのみ成立ち得るのである、卽ち質的なものを量的に考へることによつて成立つたのである。勿論今日の化學的元素といふ如きものは單に同質的なものではない、從つて未だ純粹に量的に考へられたものではない。唯今日の電子論が發展して、種々の原子が、タムソンなどの考の樣に、電子の數とその結合とから說明ができて、はじめて物質の區別は同質的なるものゝ量的區別といふことゝなるのであらう。右の如く考へることができるならば、同質的なるものゝ量的關係といふ如きことから、如何にして感覺的性質といふ如きものが出て來るかは到底說明はできぬ。何故に波長の長い光線によつて起された眼底の刺戟が赤と感じ、波長の短い光線によつて起された刺戟が菫色と感ぜられるかは說明ができぬ、そこにはデュボアレーモンの云つた如く自然科學的知識の限界があると云はねばならぬ。若し物理學者の考へる如くならば、光のエネルギーは無論生物發生の遠き以前に存在して居らねばならぬのであるから、光のエネルギーを光や色の感覺と變ずる力は之を我々の視神經とその中樞とを求めねばならぬ。生物の神經系統にかゝる力があると云へばそれ迄でのことで

あるが、そは何等の說明を與へないと同然である。我々の知る所は、單に生理學者が神經刺戟と稱する一種の化學現象に、何時でも色とか音とかいふ精神現象が伴ふと云ふに過ぎぬ。若し生理現象といふものを、機械論者の考へる樣に、物理的又は化學的に說明ができるとするならば、同一の物理化學的現象でありながら、或場合に於て精神現象を伴ひ、或場合に於て之を伴はぬといふのは、此等のものゝ結合の仕方によると考へるの外はなからう。併し如何にして或種の物質的結合にのみ精神現象が伴ふのであらうか。矢張單に此の如き平行の事實があるといふ以上に何等の說明を與へることはできまい。物理學に於て、熱をエネルギーの一種と考へ、熱を機械的エネルギーに變ずることもできれば、又後者を前者に變ずることもできるといふが、これは決して機械的運動が我々の熱の感覺に變ずるといふのではない。量的に考へられた熱と運動のエネルギーとの間に、不變の關係があるといふまでゞある。生物があつてこのエネルギーを熱と感ずると否とは、熱のエネルギー其物に何等の關係もない。又我々が今日熱と感じて居るものを光と感じ、光と感じて居るものを熱と感じても毫も差支はないのである。

所謂物體界から出立して考へて見れば、右の如き結論に陷らねばならぬのである

が、余は今此考を逆にして我々の意識界から出立して見よう。意識界から見れば我々の身體も意識界の一現象たるに過ぎぬ、光や色を感ずる眼はまた光や色の世界に屬するのである。一方より見れば我々の意識は物質現象の附屬物に過ぎないかも知れぬが、一方から見れば物體現象といふのは意識現象の一種の解釋に過ぎぬと考へることができる。眼がなければ色や光やの感覺がないと云ふが、これは上に云つた如く眼と云はれるものと光や色の感覺との間に不變的結合があるといふに過ぎぬ。或一人の感覺の原因として考へられる眼といふものは他人の感覺界の一部分である、全意識界の立場から見れば或感覺の消滅と共に、或一個人の光覺といふ一群の現象が消失するといふに過ぎない。生物全體の眼がなくなるとか又は未だ發生せなかつた場合では、他の感覺の一部分たる生物の眼といふ一現象が消滅すると共に、光覺界といふものが消滅するといふことである。斯くして意識界から見れば、我々の身體も意識界に屬し、我々の感官と神經系統とが感覺の原因であるといふことは、或意識現象の生滅に伴ふて或意識現象が生滅するといふことである。眼が全然光や色の世界のみに屬し、その他の感覺界と關係がなかつたならば、光覺の原因と考へられる眼といふものはない。如何に考へ行くも、我々の感官其物も外界刺戟も共

に我々の感覺界に屬することを免れない、我々は到底意識の範圍外に脱出することはできぬのである。感覺を生ずる感官は又感覺の中に屬すると云はねばならぬ、全然感覺的内容を離るれば單に現象と現象との間の函數的關係といふ如きものゝ外何物を考へることはできないのである。物體より精神を生ずるといふことは單に不可能であるのみならず却つて前後顚倒である。

我々は普通に觸覺を以て實在の感官と考へる傾を有するが之に代ふるに光覺を以しても何等の矛盾はない。觸覺が光覺や音覺よりも物體自體の性質に一層接近して居る譯はない。觸覺現象を物理的に解釋した物質と音覺現象を物理的に解釋した物質とは同一の物質である。同一の物質が種々の感覺的性質に於て現はれるのである。而して兩現象の根柢たる物質が同一であるといふのは兩現象の變化が同一のエネルギーの法則によつて說明ができるといふに過ぎない。光覺的現象は同一の法則によつて說明ができなかつたから、物質の外にエーテルといふものが假定せられたのであるが、相對律原理に於ての樣にエーテルを無用と考へることもでき、又電子論に於ての如く、電磁氣のエネルギーによつて、すべての物理現象を說明し得ることができれば、物質は電氣となつてしまふのである。物體はもはや觸覺的の

ものではなく、却つて光覺的現象の基の如きものが物體の根本と考へねばならぬのである。生物發展の歷史から云へば、無論觸覺が先づ發達して、光覺とか音覺とかいふ如きものは後に發達したものと考へねばならぬのであらう。併し無論過去の觸覺が現在の光覺や音覺の原因となつた譯ではない、觸覺も光覺や音覺と同じく意識現象であつて、後者の原因となる物質も、前者の原因となる物質も、同一の物質でなければならぬ。ヘルバルトがすべて感覺に對して實在 Realen といふものを考へた如くに、我々は普通に觸覺的內容を實在化して、之に依つて永久不變の物體界を考へるのであるが、今日の物質電氣觀の如きものを眞理とすれば、觸覺を基礎として考へられた物質界といふ如きものは眞の物質界といふことはできなくなる。觸覺を基礎として考へられた物質觀は粗笨であつて、我々は光や電磁氣の現象によつて一層精微な物體內部の狀態を知ることができると云ふこととなる。光覺などの發展によつて、初めて物質の微細なる作用を知ることができるのである。光覺は意識發展上では後であるかも知らぬが、レヤーレンの如きものから考へれば、却つて根本的であるといふこととなるであらう。(未完)